

出品作家略歴

辻永（つじ・ひさし、1884-1974）

広島県生まれ。東京美術学校西洋画科在学中、岡田三郎助に師事。1904年、第9回白馬会展に初入選。1908年には、第2回文展で初入選を果たす。その後、第3回文展出品作《牧場の山羊（放牧）》（李王家買上）、第10回文展出品作《椿と仔山羊》（文部省買上）など、山羊をモチーフに描き、「山羊の画家」と呼ばれる。1919年、第1回帝展無鑑査。1920年に渡欧、三宅克己と交遊する。戦後は日展、光風会に出品。1959年、文化功労者。

刑部人（おさかべ・じん、1906-1978）

栃木県生まれ。幼い頃、川端龍子や鶴田吾郎らが指導するスケッチクラブの通信講座を受ける。1918年に上京、東京美術学校西洋画科在学中に帝展で初入選する。以後、新文展で無鑑査となる。戦後は日展で特選となり、1968年日展会員に選ばれる。写実を基本に、ペインティングナイフの先端をたわめたときの反動を利用して生乾きの絵具を重ねてゆく、独自の風景画の様式を確立した。

中村善策（なかむら・ぜんさく、1901-1983）

北海道生まれ。本名は善作。1924年上京し、川端玉章の川端画学校に学ぶ。翌年《風景》で第12回二科展初入選、以降同展に出品する。1937年に二科展を離れ、一水会会員となる。1943年、第6回文展審査員。1945年、信州明科（現・安曇野市）へ疎開し、石井柏亭の指導を受ける。戦後は日展、一水会展に出品し、1968年の第11回新日展では《張碓のカムイコタン》で日本芸術院賞を受賞。日展理事や顧問を歴任し、1981年日本芸術院会員に推挙される。

松木重雄（まつき・しげお、1917-2010）

長野県上水内郡信濃町生まれ。1946年東京文理科大学を卒業。1948年東京高等師範学校助教授となる。翌年第2回示現会展に《ガードのある風景》を初出品する。1954年より研鑽のためフランスに滞在しヨーロッパ各地を巡遊。1957年第13回日展《シシリーの町》が特選となる。その後、中近東、アフリカを訪れ、中南米を旅行。1968年第11回新日展に《アンデスの古城》を出品して菊華賞受賞。1974年より筑波大学教授。1976年日展会員となる。城砦や西洋の街など累積された石組を好んで描き、矩形によって構築された力強い構図と堅牢なマチエールにより重厚な質感を表現した。

寺島龍一（てらしま・りゅういち、1918-2001）

東京生まれ。東京美術学校で小林萬吾教室に学び、次いで寺内萬治郎に師事。1957年《N氏像》日展特選を受賞、光風会会員となる。1960年に渡欧し、パリで一年半修業した。帰国後は舞妓をはじめとする女性像や、前景に女性を配してスペインやイタリアの風景と組み合わせた構図の作品を作り上げた。1976年以降は14回渡欧し、アンダルシア地方の風景を好んで描いた。1970年《座像》が第2回日展菊華賞を受賞し、その後、日展審査員、日展会員、光風会理事を務めた。

向井潤吉（むかい・じゅんきち、1901-1995）

京都生まれ。関西美術院で伊藤快彦、都鳥英喜らに師事。1919年、第6回二科展に初入選。1930年、第17回二科展で犇牛賞受賞。戦時中は従軍し、戦争記録画を描く。空襲で焼かれ消えゆく民家を知り、1945年の《雨》で初めて民家の作品を手掛ける。同年行動美術協会を結成、以後同展に出品。戦後は日本各地を旅しながら日本の風景の美しさを描き残した。日本国際美術展、現代日本美術展などにも出品。

中村不折（なかむら・ふせつ、1866-1943）

江戸生まれ。本名は鉾太郎。幼少期に母の郷里である長野県高遠（現・伊那市）に移る。飯田で河野次郎に絵を学び触発され、1888年に上京。小山正太郎の画塾・不同舎に入り、画技を磨く。1901年渡仏し、翌年からアカデミー・ジュリアンでジャン＝ポール・ローランスに学ぶ。帰国後は太平洋画会会員となり、1907年には第1回文展審査員に任命される。書家としても知られ、漢籍の知識を生かし、神話や伝説を元にした裸体画を得意とした。

高田誠（たかだ・まこと、1913-1992）

埼玉県生まれ。1929年、旧制浦和中学在学中に《浦和風景》で二科展初入選。翌年、安井曾太郎を尋ね、以降安井に師事。1936年、安井らによって一水会が創設されると同会に参加。1938年、一水会第2回展に《山村秋日》《湖畔秋色》ほか4点を出品、一水会賞を受賞する。戦後は日展、一水会展を中心に出品。1972年、日本芸術院賞受賞。1978年、日本芸術院会員。1983年より3年間日展理事を務め、1987年、文化功労者となる。

横井弘三（よこい・こうぞう、1889-1965）

長野県下伊那郡飯田町（現・飯田市）生まれ。幼少期に東京へ移り、早稲田大学商学部に入学。絵画は独学で学ぶ。会社勤務の傍ら二科展に出品し、1916年に第1回樗牛賞を受賞。素朴な作風から、「日本のアンリ・ルソー」と評された。次第に中央画壇から離れ、長野市への疎開を機に、晩年の約20年間は長野市を中心に精力的な活動を続けた。油彩画のほか、金属や薬品を用いて板などに描く焼き絵も多く残している。

三沢忠（みさわ・ただし、1935-）

長野県下高井郡平岡村（現・中野市）生まれ。櫻井慶治に師事。画家を志して上京後しばらくは都会風景などを描いたが、古里の山を描いた《雪の高社山》が1955年の第41回光風会展に初入選。40代で長野県山ノ内町に山小屋風のアトリエを建て、豪雪のなか雪かきをしながら制作に没頭した。1983年の第15回日展出品作《豪雪》は現中野市で描き特選を受賞。2007年第39回日展で《浅間山》が文部科学大臣賞を受賞。「豪雪の画家」といわれ、雪にこだわり雪景色を描き続けている。

河野次郎（こうの・じろう、1856-1934）

江戸生まれ。足利藩の江戸藩邸出身である。子は河野通勢。少年期に南画家の田崎草雲に南画を学び、次いで洋画を高橋由一に学ぶ。油彩画や水彩画だけでなく、銅版画や石版画にも取り組むなど、持ち前の好奇心で西洋美術の世界を自分のものとしていった。図画教師として1882年に愛知県師範学校から長野県師範学校松本支校へ移り、1886年からは長野師範学校で教鞭を執った。この間も石版画で教科書を作成したり銅版画も研究する。写真にも興味をもち、退職後には長野で最初の写真館を開いた。

山本鼎（やまもと・かなえ、1882-1946）

愛知県生まれ。従弟は村山槐多。東京美術学校で学び、卒業後の1907年に石井柏亭らと雑誌『方寸』を創刊する。1912年渡仏。国立美術学校で学び、小杉未醒らと各地を旅行する。帰国後日本美術院同人に推薦され、1918年には創作版画協会を結成。1920年に日本美術院を脱退すると、2年後小杉や梅原龍三郎らと春陽会を設立する。リアリズムを標榜し創作版画の分野を確立、児童画教育や農民美術運動にも注力した。

不破章（ふわ・あきら、1901-1979）

東京生まれ。1923年第10回日本水彩画会展に初出品、翌年同会会員となる。この頃より、石井柏亭に師事。1927年第8回帝展に初入選。戦後は1947年に一水会会員となり、日展審査員、日本水彩画会理事長、一水会常任委員を歴任する。全国各地の風景を現地で写生した若い頃から信州にも多く訪れた。師の柏亭が松本に疎開していたこともあり、特に安曇野から白馬方面の風景を数多く描いている。

菱田春草（ひしだ・しゅんそう、1874-1911）

筑摩県伊那郡飯田町（現・飯田市）生まれ。本名は三男治。画家を志して上京し結城正明に師事、1890年に東京美術学校第3期生として入学。1895年同校卒業。岡倉天心、橋本雅邦の指導を受け、1898年日本美術院の創立に参画する。横山大観、下村観山、西郷孤月とともに「雅邦門下の四天王」と呼ばれ、古画と洋画の研究を通して日本画の革新に尽力した。初期文展に出品し、受賞を重ねるも病に倒れ、36歳で夭折。

西郷孤月（さいごう・こげつ、1873-1912）

筑摩県松本（現・松本市）生まれ。本名は規めぐる。1889年、東京美術学校第1期生として入学し、橋本雅邦に師事。研究科修了後の1896年には同校助教授となるが、1898年に岡倉天心らと共に辞職。同年、天心と雅邦率いる日本美術院に参画し、横山大観や菱田春草、下村観山と共に「雅邦門下の四天王」と呼ばれる。1897年第3回絵画共進会で銅牌一席となる。院展の俊秀として将来を期待されたが後に日本美術院を離れ、諸国放浪の後、病に倒れ夭折。

熊谷好博士（くまがい・こうはくし、1917-1985）

長野県飯田市生まれ。本名は好博。1934年に上京し、池上秀畝、その後、川端龍子に師事して日本画を学び「好博子」と号し、青龍展に出品、入選する。1951年に江戸友禅の道へ進み、日本伝統工芸展、伝統工芸新作展で受賞を重ね、1964年の第1回染芸展では東京都知事賞を受賞する。江戸友禅の意匠や技法を踏襲しながら「天然自然の造型」と称する、樹木の空目や葉脈、石の表面など自然の形象を生かした文様を生地に写す技法を編み出し、斬新な作品を数多く残した。

高池録博（たかいけ・ろくひろ、1926-2002）

長野県長野市に生まれ。1948年武蔵野美術学校西洋画科入学。独学で染色技術を学ぶ。1956年から長野県展にて受賞を重ね、光風会・日本現代工美術芸展・日展を中心に出品。1967年、1968年と連続して光風会で受賞、1970年改組日展で「創」が特選・北斗賞を受賞。1973年現代工芸美術展で外務大臣賞受賞。光風会評議員、審査員、現代工芸美術家協会会長、信州美術会副会長など歴任。

曾宮一念（そみや・いちねん、1893-1994）

東京生まれ。旧姓は下田、本名は喜七。日本水彩画研究所の講習に通い、丸山晚霞らの指導を受ける。東京美術学校に入学後は藤島武二に師事し、1914年の文展に出品した《酒倉》が入選、褒状を受ける。卒業後1925年の二科展では《冬日》で樗牛賞を受賞する。1931年、二科会会員に推挙されるも1934年に退会、独立美術協会会員となり、さらに2年後国画会へと移る。1946年、日展審査員に就任する。晩年に失明して以降は書や歌、随筆に専念する。

広幡憲（ひろはた・けん、1911-48）

秋田県生まれ。旧姓高橋、本名憲太郎のち憲導。1924年上京、日本大学で洋画を学ぶが中退し、独自に絵画研究を進める。1935年秋田に戻り記者となる。1937年、藤田嗣治の壁画制作に際して助手を務め、再び上京。同年二科展に出品、初入選。1938年同会に設けられた九室会の結成に参加し、翌年には絶対象派協会結成にも加わる。1946年二科会再建第1回展で特賞受賞、会員となる。有機的な形態を用いた画面を特徴とし、前衛画家の旗手として知られた。

石井鶴三（いしい・つるぞう、1887-1973）

東京生まれ。父の鼎湖、長兄の柏亭はともに画家。不同舎に入り小山正太郎に学ぶ。1905年に東京美術学校へ入学し、1911年の第5回文展に入選。1913年に研究科を修了したのは日本美術院研究所で学ぶ。1915年の再興第2回院展に《力士》を出品し院友となる。日本美術院を中心に彫刻家として活躍する傍ら、創作版画協会の設立に携わり、また新聞小説の挿絵を手掛けるなど多彩な活動が知られる。

浜達也（はま・たつや、1913-1989）

長野県諏訪市生まれ。1927年に上京し、清水南山に師事し、唯一の内弟子として彫金を学ぶ。1940年の紀元2600年奉祝展で《瑞祥手筈》が初入選するも、1942年に応召され、終戦まで創作活動から遠ざかる。終戦後は意欲的に作品を制作し、日展や光風会展に出品。1948年第4回日展で《のうぜんかつら壺》が特選を受賞、1967年日展会員となる。

松井康成（まつい・こうせい、1927-2003）

長野県北佐久郡本牧村（現・佐久市）生まれ。本名は美明。1957年に茨城県笠間市の月崇寺住職となると、1960年に同寺内に窯を開き、中国や朝鮮、日本の古陶磁を研究。1968年から田村耕一に師事し、田村の助言で練上の技法に特化して翌年の伝統工芸新作展で初出品、奨励賞を受賞する。1973年の日本陶芸展では最優秀作品賞・秩父宮賜杯を受ける。1993年に重要無形文化財「練上手」保持者（人間国宝）に認定される。

小山周次（こやま・しゅうじ、1885-1967）

長野県北佐久郡小諸町（現・小諸市）生まれ。1900年、私立小諸義塾に入学、島崎藤村、三宅克己、丸山晚霞らに学ぶ。1902年、晚霞の内弟子となる。1910年頃に上京、太平洋画会研究所、日本水彩画会研究所に学ぶ。1913年、日本水彩画会の創立に加わる。1923年から中国、アメリカ、フランスに各半年程滞在する。日本水彩画会展や二科展を中心に作品を発表、水彩画を専門とし、その普及と指導に尽力した。

川瀬巴水（かわせ・はすい、1883-1957）

東京生まれ。本名は文治郎。はじめ川端玉章門下の青柳墨川、荒木寛友の下で日本画を、1908年に白馬会葵橋洋画研究所に入り岡田三郎助に洋画を学ぶ。1910年に鏑木清方に師事し、「巴水」と命名される。1915年、清方門下による郷土会第1回展に出品。1918年、渡辺版画店より版画による処女作3図を出版。以来、日本全国をたずね歩いた写生をもとに、『旅みやげ』『日本風景選集』など数多くの風景版画を送り出した。

伊藤孝之（いとう・たかし、1894-1982）

静岡県生まれ。京都高等工芸高校図案科を中退し、1919年東京美術学校日本画科に入学。結城素明に師事する。1927年第8回帝展で入選、以後日本画家として制作を続けた。一方で東京美術学校在学中より児童雑誌に挿絵を描くほか、渡邊版画店より木版画作品を発表。その後1960年代まで風景版画や「自画自刻」の版画を多く制作した。1944年空襲により自宅や作品を全て失い、青森県弘前に疎開。1962年に東京に戻り、1967年創作画人協会の結成に関わった。

清水敦次郎（しみず・あつじろう、1894-1962）

新潟県生まれ。1915年に上京し、太平洋画会研究所で学ぶ。1918年、第12回文展で《寺島の工場》が初入選。以後、文展、帝展、日展に出品を続け、1946年の第2回日展で《水車への流れ》が特選を受賞した。戦時下の1945年には空襲でアトリエを消失し、長野県木曽郡三岳村（現・木曽町）へ疎開。戦後一度東京へ戻り美術教師を務めるも、再び三岳村へ戻り、山や溪谷の作品を好んで制作した。

伊東深水（いとう・しんすい、1898-1972）

東京生まれ。本名は一。父が事業に失敗し、小学校を中退、看板工や活字工、石版画工となり水野年方門下の中山秋湖について日本画の手ほどきを受ける。1911年に鏑木清方に師事し、翌年から異画会や日本美術院に出品。16年に版元・渡邊庄三郎の下で絵師・彫師・摺師による分業制の新作版画の制作に着手し、美人を題材とした版画の他、『近江八景』など風景版画も多数手掛けた。日本画においては美人画家として知られ、昭和期の帝展や日展で活躍した。

村松乙彦（むらまつ・おとひこ、1912-1983）

愛知県生まれ。太平洋美術学校で学び、日本美術学校日本画科を卒業。その後、児玉希望に師事し、1941年の第4回文展で初入選。戦時中は従軍画家としてフィリピンやマレーシアなどに赴いた。戦後、1946年の第2回日展より出品し1949年の第5回展と1951年の第7回展では特選を受賞。1962年日展会員となる。

登内微笑（とのうち・みしょう、1891-1964）

東京生まれ。本名は正吉。幼少期に母を亡くし父方の郷里である長野県上伊那郡へ移住。1908年に上京し、寺崎広業に師事。1918年には京都へ移り、菊池契月に学ぶ。1922年京都市立絵画専門学校（現・京都市立芸術大学）へ入学し、1924年卒業。この間、1920年の第2回帝展で初入選し、第6回、第8回では特選を受賞。第9回展から帝展推薦、翌第10回展では審査員となった。新文展や日展でも活躍し、京都画壇を牽引した。